

※ [# 「さんずい+麩のへん」、第4水準2-79-37] かみ浪人

吉川英治

青空文庫



親の垢あか

几帳きちようめん面な藩邸はんていの中に、たった一人、ひどく目障めざわりな男が、この頃、御用部屋にまごまごしている。

彼は、俗にいう、ずんぐりむツくりな体格で、年は廿六、七歳だった。若いくせにいつも襟えりもと元がうす汚い。袴はかまの紐ひももよく締まつて居ないと見えて、後下うしろがりに摺ずツこけている時が多い。

『オイ、数右衛門かずえもん』

と、呼ぶと、

『ウウム』

と、体からだぐるみ廻して振向くと云つたような鈍重漢である。すこし猪首いくびのせいであろうが、そのくせ人を見る眼は、ぎよろりと一癖くせあるので、そう小馬鹿にも扱い難い。

従つて、彼にはまだ友達ができない。尊敬する気にはなれないし、顎あごで使うには厄介やっかい

なのだ。ここの御用部屋には、馬廻り役とお使番とが雑居していて、相当用事も多いのだが、数右衛門だけは、いつも事務から遊離ゆうりして、まごついているふうであった。

稀 《たまたま》、誰でもいいような使命を当てがうと、平気でずぼらをやるし、又忘れッぽい。とても他家へ立つ使者だの、君側の大事な用向などには遣やれたものではない。

だから御用部屋が閑ひまだと彼もほつとするらしい。忙しい時まごまごするのは、彼の責任感がさせるのだった。閑になると、上役や同僚のやっている囲碁いごを、後に立って懐ろ手で頭越のぞしに覗のぞいて居たりする。

『誰だ、あれは』

兎角とかく、誰にも気になるとみえて、まだ彼を知らない奥向の老臣などでも、よく彼の同僚は訊ねられた。

『は、あれは先頃、お国表の方から江戸詰に転役して参った——不破ふわ数右衛門でございませう』

そう同僚が答えると、次にはきつと、誰でも同じように頷うなづいて呟つぶやいた。

『——道理で、何処どことなく、浪人くさい男じやと思つたら、あれが岡野治太夫のせがれか。それでまだ、親の垢あかが抜けておらぬのじやな』

## 浪人ぼね

さむらいの中には、浪人骨ろうにんぼねという言葉がある。元和慶長頃の粗野な血をそのまま持つていて、元禄という文化時代へ来ても、どうしてもそれが洗練されない——そして平和な社交で奉公人の型に飾はまらない人間——それを、

(浪人骨ろうにんぼねのぶとい奴)

と、よく云うのである。

数右衛門がそれだし、彼の親の岡野治太夫が又それだった。豪放不羈ごうほうふきな質たちだったのであろう、もう十数年前に、浅野家を浪人して、頑がんとして、陋巷ろうこうに貧乏を通して死んだ。

べつに、罪科があつての浪人ではないから、その子の数右衛門は又、元の浅野藩の家へ養子に貰われて来た。しかし、親ほど浪人骨がぶといとは、養家でも思わなかつたに違ちがい  
ない。

ところが、数右衛門の浪人骨は、親の治太夫以上にぶといものだった。今でも、国元の者のあいだに、

『何せい、殿様を謝あやませたのは、彼奴あやつばかりだからのう』  
と、話柄わへいに残っている事がある。

それは、或る夏だった。

赤穂城に近い千種川ちくさで川狩が催された時である。舟中の宴の座興ざきように、内匠守長矩たくみのかみながのりがふと云い出した。

『誰ぞ、あの飛び交う燕つばめを斬り落してみい』と。——そして近習きんじゆうの中に交じっていた数右衛門に、眼が止まった。

『そちに申し付ける』

数右衛門はだまってお辞儀をした。お断りするだろうと皆思っていると、彼は小舟を放して、川の中ほどへ行き、刀を抜いて擣ためていた。

するどい声と共に、彼の体と刃やいばとが、宙ちゆうへ閃めいて、伸び上ったと思うと、水面に片羽を切られた燕が一羽、浮いて流れて行った。

『ようした』

と、内匠頭は呼びよせて、杯を与えようとしたが、数右衛門はすっかり面を膨らせて、何か、不平そうに固くなつた儘、手を出さないのである。

『何とした？』

内匠頭が云うと、

『今日限り、お暇を頂戴いたします』と云うのだつた。

彼の理由には当然なところがあつた。自分の武芸は、一朝君家に何事かあつた場合に役立たせる為のもので、こんな座興に供する為に研いでいるのではない。——けれどもし厭だといえば臆したと嗤われるであらうし、君命にも反く。そしてもし、為損じれば、男として腹を切らなければならぬから——武家奉公というものがこんなものなら廃めたほうがいい。つらつら父治太夫が浪人した気持ちもわかると、臆面もなく云つて退けたのである。

『悪かつた。数右衛門、わしが悪かつた』

——それ以後、内匠頭は、家臣へ向つて、そういう座興めいた事を強いた例はまったくなかつた。

だが、数右衛門のぶとい浪人骨は、少しも細くなつて居ない。

この夏（元禄七年であった）——彼が、国許から転役を命じられて、江戸詰に廻されて来た理由も、そのごつい浪人骨が因を為していた。

国家老の大野九郎兵衛から、在府の殿の手へ届いている人事上の文書には、

（数右衛門不埒の事）

として、三つの箇条が書上げられてあった。その三箇条というのは、

第一、平生殺傷沙汰多く、辻斬り据物斬りなど好む事

第二、勤務粗暴にて忠誠なき事

第三、平素勝手元不如意を申し立てながら、多く人を聚め、酒振舞いなどいたし、武家

屋敷にあるまじき囃子など時折り洩れ聞え候事

——だが内匠頭はその書面を握りつぶしているのであった。彼はなかなか人を捨てない主君であった。国表では使い難いそうだから江戸へ廻せという程度で、定府の方に転役させて、何も云わずにいた。

数右衛門は勿論、この転役を欲ばなかつた。国許なら自由もきくし、野広く生きていられる気がするが、江戸の藩邸では、朝も夕も、主君と一つ棟にいて、聲音も気をつけて歩かなければならないし、非番となつても、藩邸内の長屋住まいなので、馬鹿騒ぎもでき



なかつた。

それに、江戸詰の人間は、どれもこれも軽薄に見えた。社交が上手で、身綺麗で、何かというと、殿様の前で声を密ひそませるのを得意としている。そんなわけで数右衛門には、三月経つても、四月経つても、親しい友は出来そうもなかつた。

作らぬ俳人はいじん

今も。

碁ごを囲んでいる連中の頭ぶごしに、懐中手ふところして突つ立っていた。

『……………』

その数右衛門が、時々、くすくす笑うので、富森助右衛門とみもりすけえもんに打ちこまれて敗け色の田中貞四郎は、気になって堪らない。

時々、じろつと、数右衛門の顔を睨ねめ上げるが、数右衛門の神経には何もひびかないの

だ。

側には、中村清右衛門だの、他四五名も見ているが、誰も立ってなど居る者はない。その者たちも、数右衛門の不作法や笑い方が気に障さわっていた。

で、一局崩くずれると、

『不破氏』

と、清右衛門が振向いた。

『——貴公、だいぶやるようだな。一戦、試みよう。坐んなさい』

『いやあ、拙者あ、碁など一向に知らん』

『でも、覗のぞいていたではないか』

『退屈だからで』

『然し——何も分らない者が、そう長く熱心に見ていられる訳のものではない』

『拙者が見ていたのは、つい襟元から盤の上に取り落した虱しらみが、誰の所へ歩いて行くかと、それを楽しみに見ていたのでござる』

呆あきれた眼と、憤いきどおつて青くなつた顔とが——彼のうしろ姿を見送つた。数右衛門はぶらりと御用部屋の外へ出て、欠伸あくびをしていた。

脇玄関わきの小廊下に、明るい秋の日が映さしていた。萩垣根の下に、萩の花を浴びて、この頃生れた犬の子が白い親犬に戯たわむれている。

『小僧、小僧……』

数右衛門は、自分の手を、犬の子に噛かませて、戯たわむれていた。すると今、門の方へ出て行くこうとした藩士の一人が、足を止めて、退屈たいくつそうな数右衛門を振向むかっていたが、眼を見合すと話しかけた。

『お閑ひまか、不破殿』

『さればで……』と、彼も自分の持て余している体に気づいて、苦笑した。

『どうですか、御一緒しよにそこら迄』

『お供ともいたそう』

数右衛門はすぐ草履ぞうりを穿はいた。江戸はまだ不案内なので、一も二もなく、そう云つてくれた人の好意こういがうれしかった。

その人は、御腰物番おこしもの大高源吾であった。源吾はいつも、御用部屋おこしむらにいながらそこに同化どうかしていない数右衛門をながめて、

(友達ともだちがないな)

と、察していたのである。

外へ出てから、数右衛門は訊ねた。

『何処へおいでになるのでござるか』

『深川ですよ』

『深川』

『今夜の会は、永代えいたいの千鳥庵せんちょうあんでして、大川尻おほがわしりの眺めながめもなかなかいい所です。まあ一度来てごらんさい』

物柔かい言葉づかいが、京都の大町人を思わせるような所がある。数右衛門は心の中で、こんな侍は国許の方には居ないなと思つた。

久しく酒にも濁かわいている。心から飲みあう友がないからだ。ともかく数右衛門は従ついて行つてみた。千鳥庵といえばいずれ洒落しやれた料理屋りやうゐであろうと思つて。

ところが、そこは静かな川沿いの貸席かぢで、宗匠そうしやう頭かう巾きんの老人らうじんとか、医者いしやとか、僧侶そうりよとか、町人の旦那衆だんなしゆと云つたような者ばかりが、ひっそりと、墨すみの香かの中に集まって、各

《めいめい》、筆と短冊たんさくを持ち、咳せきもせずしわぶきに俳句はいくを作っているのだった。

(来るのでなかつた)

と、数右衛門は後悔したが、追いつかなかつた。

夕方、弁当に酒が一本ずつ出たので、せめて、それを慰みに、運座うんざの様をながめていた。じつと、話しもしないで、それで退屈そうでもない人々が、彼にはふしぎだつた。

——柿紅葉かきもみじ

——新酒

——後の月のち

そんな席題が貼り出されてある。何の事か、彼には分らなかつた。大高源吾の句が読みあげられると、子葉という名で答えたので、

(ははあ、子葉という俳号はいごうを持っているのか)

と、数右衛門は初めて知つた程だつた。彼の前にも、紙と筆が配られてあつたが、元より句など作れもしなかつたし、作ろうとも思わない。そのうちに欠伸あくびが出てならないので、肱掛窓ひじかけに倚よつて、大川の夜空を見ながら、無意識に鼻糞はなぐそをほじっていた。

最初の女ひと

運座の帰り途である。

『まだ御存じはあるまい。こちらは、一閑殿いっかんと申されて、同藩の小山田庄左衛門殿しょうざえもんの御厳父げんぷですよ』

と、大高子葉ひきあに紹介ひきあわされて、

『わたくしが、不破数右衛門でござる』

と、途々みちみち、挨拶を交しながら、三人で連れになった。

小豆色あずきの十徳に、投げ頭巾をかぶり、袖口から小田原挑ぢょうちん灯をぶらさげて一閑は歩いてる。人品のいい、肯きかない気性の老人に思われた。

『御息は、まだお独りですか？』

何かの話から、子葉が云うと、老人は尖った肩を振って、

『さて、彼奴あいつがの、いつになったら、女房でも持つ気になるか。はははは』

闇を払うように、大きく笑ってから又、

『兄よりは、妹のほうがもう妙齡としごろ。これは盛りを過ぎてはいかぬ。虫のつかんうちに、

子葉殿も、ひとつ心がけておいてくだされ』

と、真面目に云った。

『あのお千賀どのが、もうそんなお年頃かの』

『廿歳はたちを一つ越えたがなあ』

と、一閑は舌打ちするように、嘆じて云う。

永代橋まで来ると、子葉は俳友の雪中庵が、風邪で寝ているので、見舞に立ち寄ると云つて——別れ際に、

『数右衛門殿、ちようど鉄砲洲への行き道故、御老人をお宅の側まで、送ってあげて下さらぬか』

云い残して、川筋へ曲がった。

数右衛門はちよつと気色きしよくに障った。別れたら独りで何処どこかで飲もうと胸算むなざんしていた当てが外れたからである。

だが、一閑はさばけた老人だった。若い者のそういう顔色が疾とく見えたのか何うか。

『まだ早い、ついでに拙宅へお寄りなさらんか。伴せがれも好きな方じや、夜長に一献酌こんくみ交そうで』

と、云う。

寄つてもいいと考えていた。ところが、蠣浜橋の上まで来ると、足早に摺れ違つた黒羽織の武家が、足を止めて、

『小山田の隠居か』

と、呼びかけた。

一閑が、何気なく、

『おう、誰か』

振向いた時、その男は、いきなり羽織を脱ぎすてて跳びかかつて来た。——きらつと、白刃が眼を掠めたので、

『——何するツ』

一閑は刎ね退いたが、もう七十ぢかい老齡である。体に粘ばりのないせいか、その勢いのまま、仰向けにひっくり転じた。

『老人。おれに恥をかかせたな。恥をつ』

こう喚いた顔の上に、高く刀を持つと、武士は二度目の踵を蹴って、起ち上ろうとする一閑の真つ向へ——



『覚えてかつ』

と、大なぐりに振り下ろそうとした。

その迅はやかつた事に、数右衛門もハツと思った。国許で辻斬をやったおぼえのある彼は、今の言葉が耳に入らなかつたので、それだと直ぐ思った。

彼の伸ばした腕は、一閑の頭へ、刃が降りない先に、その武士の襟がみを掴つかんで、勢よく引き戻していた。

『下手め！ そんな事で、辻斬りができるか。顔でも洗って出直せっ』

——どぼうんと、途端とたんに真まつ白な飛沫しぶきが橋杭しほの下から立った。欄干らんかんを越えて、一閑の体にも、数右衛門の影にも、水玉がかかつた。

『……わっ、冷たい』

不意打の白刃よりも、その方が彼を遙かに戦せん慄りつさせた。するとその機しおに、  
『お父様っ……』

と、走り寄つて、一閑に抱きついた女性があつた。数右衛門が、生れて以来、美しい人——と此の世で意識した女性の、最初のを、彼はそこに見たのであつた。

## 彼の場合

末娘のお千賀ちがであつた。

娘も次男も三男も、みな他家へかたづいてしまい、小山田家には今、後とりの庄左衛門と、末娘のお千賀としか残っていない。

一閑は、腰をさすつて、欄干を力に起ちながら、

『やお千賀じゃないか。なんでこんな所へ? ——』と、眉をひそめた。

『でも……今の織田雄之助様がひどい御血相で、お父上の出先へ行き、一分を立てるのだ、ほんとに怖い捨て言葉はを吐いて行らつしやいましたので、もしも、こんな事がありはしないかと案じましたので』

『じゃあ、わしの留守に、又来おつたのか』

『ええ……兄様は、織田様の声を聞くと、居てはまずいと、裏口から出ておしまいになるし』

『それは困つたろう。揚句あげくの果てに、怒つたのか』

『父子おやこして、欺あざむいたのだ、一閑を斬つてしまふと、仰おほつしやいました』

『はははは。あんな骨の柔い次男坊に、小山田一閑の首が斬たれて堪たまるものかよ』

『……でも』と、お千賀は暗い川面かわもをのぞきこみながら――

『後で又、どんな事になるでしょう。旗本衆は、徒党とどうを組むから、とても怖いと、よく世間で申しますから』

『抛ほつとけ、抛ほつとけ』

一閑は、自分で相手を投げ込んだようにそう云つたが、ふと気づいて、

『そうじゃ、お千賀、数右衛門殿に礼を云え。ここまで送つて下すつたのじゃ』

数右衛門は、感心したように、お千賀の顔ばかり見ていた。当然、彼は父娘おやこの好意に甘えて、小山田家に立ち寄つた。一閑は隠居の身だし、庄左衛門は居なかつたし、百石ばかりの小身しょうしんな住居なので、気の措おける煩わづらいもない。

『もう、もう、これ以上は、頂戴できません。又、次の日に、後の分を、飲みに参ることにいたして……今宵こよいは……今宵こよいはこれにて……』

数右衛門は、へべれけに酔つて、久しぶりに堪能したらしく、帰つて行つた。

お千賀は、後で、

『おもしろい無邪気なお方でございますね』

と、父へ云った。

その晩から、数右衛門は度々遊びに来た。いつ来ても、息子の庄左衛門とは出会わなかった。

あまり家庭に見えないので、或る時、無遠慮に聞いてみると、

『旗本仲間に友だちが出来おつて、近頃、遊蕩あそびは覚えるし、交際つきあい張つて、困りものじゃて』

と、一閑は苦り切つて答えた。

そんな事情を知ると、いつかの晩、蠣浜橋で一閑に斬りつけて来た男も、何の意趣か、事情が読めてきた。

あれは旗本の織田雄之助という男だった。家柄はおそろしくいい。織田右大臣の血脈だというのである。——それが息子の庄左衛門と懇意こんいであった。

庄左衛門は、父には隠しているが、だいぶ彼から遊里あそびの借財などもあるらしく、何かの時、

(妹を妻に出来ないか)

と、雄之助から切り出されて、庄左衛門は断り難い羽目になっていた。一応という余地も措かずに、先の家柄や、裕福な点や、又男ぶりだつて、不足はなからう位で、

(承知いたしました。尊公が貰つてくださる事なら、父も妹も、ふたつ返辞で欣びましょう) まったく、彼自身も、そう思い込んだから、その通りに請合つてしまったのだ。ところが、つむじ曲がりな一閑は、息子からそれを聞くと、

(何も、旗本などに、娘をもらつて貰わんでもいい。——家筋が何じや、わけて近頃、名門の次男坊共の風紀は甚だおもしろくない。きつぱり、突つ芻ねてやれ)

すこし庄左衛門の持ちかけ方が、父や妹を喜ばせようとし過ぎて、誇大でもあつたせいだ、よけいに反感を買つて、手きびしくこう一蹴されてしまった。

だが又、機嫌のいい折もあらうと、庄左衛門は多寡をくくつて、一方の織田家へも、態よく云い繕つて来たのであつたが、一閑の気持は、其の後もいっこう変化しない。

半年過ぎ、一年経つた。

織田雄之助は、友達へも、

(お千賀どのを、妻に娶う)と、かなり前披露してしまつたし、庄左衛門もつい当座の嘘

に嘘がかさんで、退つぴきならない板挟みになってしまった。

結局、その嘘は皆、親父が頑迷で、この結婚を理解しない——というせいに帰着させて、庄左衛門は近頃、雄之助を避け初めたので、物質的な損害もうけている雄之助としては、(父子共謀のうえに相違ない)

と怒つて、ひどく一閑を怨み初めた。

それでもまだ、お千賀の意志に、多分な頼みを残して、留守を窺<sup>うかが</sup>つては、二、三度訪れたが、お千賀もふるえ上つているので、その三度とも玄関で追い帰したので、

(よしつ、その分ならば、一閑の出先へ行つて、今夜こそ、俺の一分を立ててみせる。後で嘆くな)

と、最後の捨言葉<sup>は</sup>を吐いて、千鳥庵の運座の帰りを待ちうけていたか、或はそこへ行く摺<sup>す</sup>れ交<sup>ちが</sup>いに、先夜の暴行をかつとしてやったものだった。

『——まあよかった。あれでもう来まい』

一閑は、そう云つて、ひどく肩の荷を下ろしたつもりでいた。もちろん彼としては、織田家に借も貸もないつもりであるから。そして、

『数右衛門、又来いよ』

と、彼を馳走して帰すたびに、帰り際には、きつとそう云った。口に出して礼を云う老人でなかったが、蠣浜橋の時の彼の働きは、内心大いに多としているのであろう。

偶然——そういう事情の中に懇意きとなったので、数右衛門は、老人にも愛されるし、お千賀にも、いつも笑顔で迎えられた。

で、数右衛門は、

(雄之助へは断つても、おれならばくれるな)

と、思った。

何かで、旗本のうわさだの、雄之助の話が出れば、お千賀も一閑と共に、よく云わないし、反対に、自分には絶対な好意を示す。——数右衛門の癖で、

『御息女。もう一本……』

と、酒と後引や、長座の夜更かしになつても、

『では、これつきりで御座いますよ』

お千賀が、愛くるしい眼で、睨まねはするが、決して厭な顔はしない。

その上、酔った戻りに、溝へ落ちたと云えば、洗い物を持っていらっしやいと云つてくれるし、寒くなれば、知らない間に、冬着を縫つておいて、

『お国元から参りましようが、お間に合せに、お召しくださいませ』

と、お千賀が、しつけ糸まで抜いて、身背丈を見ながら、着せてくれたりする。

気だての良さ、お千賀の美しさ。身分の高下もたんとない。それに同藩ではあるし——  
数右衛門はすっかり自分の幸福を信じていた。

江戸詰に廻されて来て、かえってよかつたと、その秋から冬まで思っていた。

### 幻影

数右衛門は、欣しいことは欣しいと表に現わす質だった。

当然、藩邸にいても、此頃の彼はちがっている。

同僚があやしんで、

『不破氏、何か欣しい事でもあるのか』

すると彼は、



『あるつ』

と、例の締まりの悪い襟元から毛ぶかい猪首を伸ばして云うのだった。

『拙者に、相愛の佳人かじんができたのでな』

『ほんとか。冬にしては、この頃ちと陽気が暖か過ぎるが』

『笑い事ではござらぬ。まだ微禄びろくだし、何の御奉公効がいも現しておらぬ故、遠慮申しているが、何ぞの折に、娶めとろうと考えておる』

『貴公の胸だけで』

『なんの、先方でも、そういう考えでいるらしい。恋は色に出ぬ程のよさと兼けん好法師こうか誰かも云うてある』

『貴公から恋の講こう釈しゃくを聞こうとは思わなかった。一体、その佳人とは誰だ』

『小山田一閑どのの娘』

『え。……お千賀どのか』

『されば』

『あれならば美人だが』

——然し、同僚の誰も、呑み込めない顔つきだった。信じぬいて居るのは、彼自身だけ

だった。

——と、或る日、

『不破氏、ちよつと、顔を貸してくれないか』

背の高い、苦み走つた美男子で、身装みなりや動作にもそつのない武士が——御廊下の隅で出会あひい頭がしらに囁ささやいた。

『や。其許そこもとは』

と、数右衛門は、丸つこい眼を上げて、彼としては、最大な慇懃いんぎんさをもつて、お辞儀をした。

『——お千賀どのの御兄上でござつたな』

『左様、てまえが、お千賀の兄、庄左衛門です。隠居や妹が、いろいろお世話になつておるそうな』

『何どう仕じつて』

『いちど、お礼を述べたいと思つていたが、お役部屋も懸け離れ、先頃までお下屋敷の方に詰めていたので、つい折もなく、失礼いたして居りました』

『何の、その御挨拶は、それがしの方からいたす事』

『所で——今日は御用の御都合は』

『さしつかえない体でござるが』

『そこ迄、何うでしょう。交際つせあつて下さらぬか。ちとお寒いし雪模様だが』

『この頃、俳諧ばやりの由でござるが、運座の席へでも』

『はははは。子葉殿のような風流は、それがしなのからではありません。もつと俗な所で——』

と、其処では一度別れて、約束の刻限こくげんに、数右衛門が通用門から出て行くと、庄左衛門は先に外へ出て居て、灰色の宵空よいぞらをながめながら立っていた。

鉄砲洲てつぽうずを離れると、

『——駕かじつ』

と、庄左衛門は、すぐ通りかかる提燈かんばんを呼び止め、何処か行く先を囁ささやいて、

『さあ、どうぞそれへ』

と、数右衛門へすすめ、自分も乗つてタレをぱらつと下ろす。

いかにも、江戸馴れている肌合が、数右衛門には、これでも同藩の人かとふしぎに思えた。もつとも、江戸表の定府組の土しと、国許のお城方とでは、誰にしても、多少気風や生

活ぶりが違つてはいるが――。

駕が着く。

そこは、日本堤づつみだった。

堀の涙橋から、少し歩いて、隅田川の方へ入ると、数右衛門などは、潜くぐつた事もない粋いきな貝殻かいがら葺ふきの門がある。いう迄もなく、吉原通いの船次ぎの茶屋だ。

酒が来る、妓おんなが集まる。

『――寒いわえ、何ぞ、温まる物でも』

というので、鍋物が膳ぜん代りに困かこまれて、数右衛門にとっては、何だか、夢みたいな気色になつた。

だが、彼はいつになく、余り酔えない。庄左衛門から、大事な話があるにちがいないと思うからだつた。もちろんその用談は、お千賀と一閑の意中を伝えて、自分の意志を聞くことと極まつている。そう話を進めて来られたら何と返辞をしよう。――来年はまだちと早い。さらう年か、三年後か。

そんな事を描きつつも、酒は好きだし、つい陶然ともなつて来る。数右衛門は顔が火照ほてつてならなかつた。

『おい、そこを少し、開けておくれぬか』

『まあ、こんなお寒いのに——』

妓おんなは、川面の障子を、初手は細目に開けたが、

『おや、めずらしいものが。……まあ、綺麗だねえ』

と、さげんで、いっばいに其処そこを開けて見せた。

隅田川の広い闇を、まるで幻を見るように、降り出した初雪が、白い綺しまをななめに描いて、一瞬、酔える人々の目を奪った。

雪見ゆきみぶね

『寒い、寒い。——そう開けるな』

庄左衛門のことばに、妓おんなたちは、あわてて両方から障子を閉たてた。

暫しばらく、燭しよく台だいが墨ぼくを吐はいている。庄左衛門はそれを機しおに、妓おんなたちを遠とほざけて、

『時に、数右衛門どの』

と、革あらたまった。

『は……』と、数右衛門は待つていた言葉を聞いたように思った。そこで彼も、努めて、着物の前を合せたり、膝を正そうとしたが、生あいたく憎ともう、手のほうがいう事をきかないらしい。かえって、妙に、酔っぱらっていることを証拠立ててしまう。

『あいや、そう窮きゆうくつ屈くつにされぬでもよい——。話はまことに簡単なのだ』

『な、なに事でござるか。……拙者に、折入つての、御用向とは』

『ほかでもないが、藩邸の中で、近頃しきりに噂うわさにのぼるらしいが——何か、噂うわさの火元は、其そこ許もと自身の口からだとは申すが』

『それは？ ……。ははあ、思い当ることもある』

『妹のことです。お覚えがありますか』

『ござりまする』

『お千賀と、すでに婚約があるような事を仰つしやるそうだが、小山田家としては、ちと迷惑に存ずる。どうか、あのような事は、以後云われぬようにして貰いたい』

『いやあ、ついそんな事を云い申したが、以後は云い申さぬ事にいたします。まだ、い

ずれにしても、両三年は、お取極めなさるまいな』

『何もまだ、考えておりません。とかく、人の口端くちははうるそうござる。足あし繁しげく宅へお遊あそびに来られる事なども、お互の為、暫く、お慎つつしみくださらぬか』

数右衛門は、言葉の表おもてに現われた事だけしか聞かない。で、彼はむしろ、その晩の酒を、祝福して充分過あごした。庄左衛門の方は、それで結構、こつちの意志は通じたものとして、一足先に、帰つてしまつた。

『……ああ、又酔つたか。こ、これはいかん、もう何なん刻どきか？』

数右衛門は、酔いつぶれていた。——ふと眼をさますと、妓もいない、庄左衛門の姿もない。

手を叩たたく、唳どな鳴る。

女中おんなが来て、

『お目ざめでございますか』

『小山田殿は、いつのまに帰られたのじや。帰り途が、分らぬではないか。弱つたぞ、これ』

『御心配なさいますな。鉄砲洲のお近くまで、猪牙舟ちよきでお送りいたします』

『猪牙舟とはなんだ』

『お舟でございます』

『舟か、それはいい』

『あれ、あぶのうございます。唯今、お支度させますから、ちよつと、お待ちあそばして』  
雪は小やみだつたが、猪牙舟の上は、耳が削そがれそうに寒かつた。

『船頭。茶屋の者が、確か酒を入れてくれた筈だの』

『その、箱火鉢はこひばちのそばに、暖めてあるのがそうで』

『才さいこれか』——数右衛門は手酌てしゃくで飲みながら、

『ああいよいよ心地じや。ゆるりとやれ、悠ゆるりと』

『下流しもへ行くんですから、碌ろくに漕こいじやありません』

『はやいのう。——そんなにこの河は流れが急か』

徳利を片手に、覗き込んでいた時だつた。猪牙舟に番つるんで従したがって来た一艘そうの屋形船やかたがある。それがいきなり舳みよしをぶつけて来たかと思うと、猪牙舟の船頭はわざと、勢いきほいよく数右衛門のそばに蹠よろけて、

『あつ、あぶねえ』



彼の腰を、とんと突いた。

数右衛門は、徳利を持った儘、川の中へ、もんどり打って飛び込んでしまった。

厚着をしていたのと、酔っていた所なので、彼は少からず面喰らった。然し、水には達者なので、すぐ大小を片手で束にして抱え、片手で袴の紐や帯を解きながら泳ぎ出したが、その間に、猪牙舟はもう遠く去っている。

近くに、素知らぬ顔して、屋形船は雪見をしていた。船障子を細目にあけて、

『見ろ、あの田舎者が、飲みつけぬ酒を喰らったので、まだあぶあぶやっている』

『いい手際だった』

『あははは、今夜あたりは定めし冷たかろうなあ』

狭い屋形船の中に、灯は華やいでいた。酒もある妓もある。そして客は五人程の旗本で、直参でない者は、その中に小山田庄左衛門一人だけだった。

『雄之助様、これでもういつかの晩の、御鬱憤は晴れたでしょうな。同時に、それがしが決してあなたを裏切っていない証拠も見て戴いたと思います』

その庄左衛門が、杯を洗って、旗本の中の一人へ酌すと、美服につつまれた色の小白い織田雄之助は、

『いやいや、すっかり胸が晴れたと迄はゆかぬ。もひとつ、晴れねばならぬものがあるぞ』と、次男坊らしい物云いで、左右にかぶりを振って見せた。

### 春待つ家

数右衛門はもうあの事を口にはしなくなった、小山田家へもそう行かない、大いに慎んでいるわけだった。それだけに又、彼のみ心理としては、前より強く、胸の中で独り楽しみを暖めている傾きもある。

『なぜか、此頃あまり、あれを云わなくなったぞ』

わざと、話しかける同僚もある。でも数右衛門は、お千賀のことは避<sup>さ</sup>ける。そして唯、へらへらと笑う。

『おめでたいというのは、数右衛門のような人物のことだろうな』

陰のうわさは、少しも彼に反映しない。眼で見ても、物事を疑うとか、疑ってみようと

かしない彼であつた。

隅田川の災難も、過失だと思つてゐるのだ。むしろ自分の不覚——恥とさえ思つて慚愧ざんきしてゐるくらいで、あの折の屋形船の中に、庄左衛門や雄之助が、自分の苦しみをながめて、酒の肴さかなにしていたなどは、彼の性格では、そう人が教えてやっても、嘘だといふに違ひない。

けれど眞実は結局、誰か眞実を見ている。至つて、友達のなかつた彼にも、

『いや、あれには、いい所がある』

と、次第に親しみを加える者が、いつとはなく藩邸の中にも幾人かは出来てきた。

押しつまつて、御用仕舞じまいの年暮くれの廿五日。

藩邸の御長屋で、数右衛門並みの同僚ばかりで十四、五名で、持ち寄りで一酌やつた。

その時一人が、数右衛門をつかまえて、おれは貴様の友達だからこそ云うのだぞと、酒の上のみではない熱意をもつて聞かせた。

小山田家のお千賀どのは、この年暮くれの三十日に、織田家へ輿入こしをする。もう、結納ゆいのうもすみ、あの家では、初春はるの支度で、花嫁の準備で、友禅ゆうぜん小布こぎれや綿屑わたくずが、庭先に掃き出されてあるのもそれが分る——と、云うのだった。

『そんな筈はござらぬ』

数右衛門は、肯んじない。

だが遠に、すこし不安な色も見せて、

『つい先夜も、拙者は、一閑殿を訪れて、晩くまで飲み合ったのだ。お千賀どのも、何も話は御座らなんだ』

と、云う。

『では何か。貴公は、一閑どのなり、又お千賀どのなりと、何ぞ固い約束でもなされた事があるのか』

友達が糺すと、

『うんにや』

と、数右衛門はかぶりを振って、そんな口約などはしてないが、自分の肚はきまつているし、お千賀どのも、自分が望めば、嫌という気づかいはないのだと、どこまでも云い張る。

『こうなると、むしろ不憫だ』

友達は、彼を前にさし置いて、露骨な顔を見あわせた。

『じゃあ、すっかり話して聞かせた方がいい。数右衛門と来ては、まるで世間も、女というものも、知らないのだから』

『云おうか……』と、友達共は、引導いんどうでも渡すように、彼を囲み直して、

『だめだよ、諦めろ』

と、宣告した。

その打明け話によると。

織田家の方では、其後も、少しも手を緩めずに、婚儀のはなしを進めていた。蠣浜橋での乱暴を、織田家の方から、かえつて人を介して、謝罪してくるし、又、多年積もっている小山田の親戚先の負債まで整理してくれるやらで、さしもの頑固な一閑も、すっかり我を折ってしまい、先頃、和解と結納が一緒に済んで、藩庁へも、婚儀の届出がもう差し出されているというのである。

『——数右衛門、これでもおぬしは、お千賀どのを、妻に持つ気か。持てるとまだ思っているか』

数右衛門は、腕拱うでぐみした儘、自分の頭を、畳の中へめり入れるように、俯向うつむき込んでいたが、やがて少し醒さめかけた顔を持ち上げると、

『何、持てないとは思わない』

と、答えた。

『え？』

呆あつ気にとられた友達おの顔を下に措おいて、彼は起ち上つていた。

『まだ、分らぬ。まだ、お千賀どのの、心こゝろというものがござる。その心を、誰が知ろうぞや』

彼は先へ出て行つた。残つた連中が、後から出て行つて、帰りがけに数右衛門の長屋の戸を隙見すきみしてみると、数右衛門は蒲団ふとんの中にもぐつて、高いい軒びきをかいていた。

『——あいつは倅こゝろせ者だよ、まだ疑うたがわないのだ。結句けっく、あのほうほうが人間は気安やすいなあ』  
かえつて彼等は、数右衛門を羨うらやしく思つて寝た。

竹垣根

悶えもたがなければ数右衛門には恋がないのだ。然し、彼にはやはり彼なりの悶えがあった。その悶え方は、かえって、悲壮な顔や、憂鬱ゆううつな眉のできる人間よりも、強いものかも知れなかった。

数右衛門のは、それがいきなり行動として出てしまうものだった。この三、四日は、多少むツつりしていたが、べつだんな様子もなかったのに、三十日が興入こしいれと聞いた——その前夜の二十九日、真夜半まよなかだったが、何思ったか不意に蒲団を刎はね退けて、

『そうだ、お千賀どのの、心のほどは、誰にもわからぬ』

ふいと、外へ飛出した。

もう門限で、藩邸は裏門ともに閉まっている。だが門番とは日頃仲がよいし、又彼は正直に、事情を訴えて頼んだので、門番もそつと隙すきを作ってくれた。

『夜明け前には帰る』

そこを出ると、数右衛門の躰あしは早かった。小山田の家は、そう広くもなく、勝手は充分知りぬいている。表は、門も扉へいもあつたが寺隣の庭の横に、竹垣根の一部があつた。彼は難なくそこを越えて入った。

明日は花嫁として、他家へ興入する女性の部屋へ、深夜、外部から戸をこじ開けて訪問

するとう事が、どんな非常識であり罪悪であるかを、彼は、そうふかく自分に咎めなかつた。がたがたと戸に手をかけている間も、数右衛門の眼には、いつも自分に会えば微笑ほほえむ彼女の顔しかなかった。こういう方法に出たのは、もう一閑だの庄左衛門だのを通して聞くよりも、彼女自身の口から、直じかに聞くべきだと思つたからである。一閑や庄左衛門には、侍として、云い難い気持も、お千賀へ向つてならば、自分も云えると思つたからである。

——当然、彼の物音に、部屋のうちの者は、すぐ眼をさました。

『あつ……誰じゃ』と、女の声在中でおののく。

『お千賀どの。——拙者だ、数右衛門でござる』

『げつ……』

慄りつぜん然と、障子へ触ふれて起つたような絹摺きぬずれが、戸を隔てた外にまで洩もれた。

『あつ、お静かに。——お千賀どの、静かに』

そのくせ、数右衛門の仕方は少しも静かでない。一枚の戸を、がたがた揺すつて、外へはずし、のっそり入つて行こうとすると、

『痴しれ者ツ』



——びゅツと、胸いたへ向つて、手槍の光が、闇の中から飛んで来た。

『しまったっ』

後ろ跳びに、庭へ跳ぶと、

『この痴れ者ツ』

と、槍は彼の影を尾け廻して、離れなかつた。

『やあ、待たれい。庄左衛門殿ではないか。数右衛門でござる』

『だまれっ、不埒な』

『何が不埒』

『その無恥、もうゆるさん』

『お千賀どのに、胸の底を、問いに来たのじや。お千賀どのを、これへ呼んでください』

『ば、ばかっ!』

庄左衛門は、声のつぶれるほど、怒つて呶鳴つた。

『あれ程、いつかも申したのに、まだ性懲もなく、妹の後を追ひ廻すか。犬のような

やつだ、武士か、それでも』

数右衛門の曾つて人に汚される事をゆるさないものに、その口汚い唾が、ぴりつと触れ

たらしかった。

『何ッ、もう一言申してみい』

蒼白の顔から、髪がさつと立った。

『犬のようだと言ったのだ。小山田家には、犬にくれるような娘はおらぬ』

『云ったなッ』

数右衛門は、相手の槍を引ッ奪<sup>た</sup>くつた。そして、庄左衛門の体を振り飛ばすように振ッて、

『なんだ、犬に獲物を奪られて、それでも武士か』

力まかせに、槍の柄で、相手の背ぼねをたたき伸めし、その槍を、お千賀の部屋の中へ、ぶんと抛り込んだ。

『わかった。売女のように、金や権<sup>けんもん</sup>門に買われてゆく女だったのか。……ベッ、ベッ、もういい、胸が透<sup>す</sup>いた』

一目散に、その儘、数右衛門は藩邸の長屋へ帰って来た。足を洗って寢床の中へ潜り込んでいた。すると廳<sup>やが</sup>て、

『卑怯者ッ、怖いのか』

『数右衛門、出て失せい』

と、門口で云い罵る者がある。追いかけて来た小山田庄左衛門と、その父の一閑なのだ。声高に家の中へ呼ばわりながら、大刀を反らして柄を叩くのだった。

厩うまやの悍馬かんば

喧嘩だという声が御長屋の隅々すみずみまですぐ鳴り渡った。藩邸なので、表役人や門側の番士なども駈けつけて来る。

『何の意趣いしゆがあつて、他家へ嫁がせる娘にあらぬ悪罵あくばを浴びせたのみか、娘の部屋へ忍び入ったか。その返答を承まわろう』

『家名に代えても、数右衛門の素ツ首そくび申し受ける。云い条あらば、これへ出て、武士らしい云つてみよ』

小山田父子おやこの周りには、何事かと驚いて起きて来た人々が、真つ黒にたかつて、宥なだめた

り、理由を訊いたり、かえつて怒られたりして、ごつた返していた。

どうして又、数右衛門が藩邸を出たか、門番の責任を云い出す者があるし、老臣を迎えに駈ける者があり、屋内へ入つて、数右衛門に何か詰問している同僚たちもある。

灰ほのかに夜は白みかけていた。

内匠頭たくみのかみは、早起だった。いつでも、厩うまやに気の荒い愛馬の脚ひびきがし出す頃には、風呂所から上つて、祖先の仏間に礼拝しているのが常である。

その間に、夫人は、竹荘ちくそうと呼んでいる奥殿の離室はなれで、静かに朝茶の釜を炉ろにかけている。その釜の湯のたぎる頃——内匠頭の庭下駄の音がそこへ近づいて来る。

『奥方おく、何であろうの』

『最前さいぜんから噪さわがしい声がいたしまする』

『長屋じやの、若侍どもが、何か争いさかいを初めたか。……宿直とくのいは誰じや』

『源吾でございました』

『茶は、後にしよう』

佩刀はかせを持った小姓こしやうは、彼の早い足の後から小走りに従ついて行った。

内匠頭は、書院の縁えんに立った。

『源吾、源吾』

『はっ』

ゆうべの宿直、大高源吾は、縁端えんはしに手をつかえて、内匠頭の眉を見上げながら、

『お耳にさわりましたか……』

と恐懼きょうくした。

『誰じゃ、あの喚わめきは』

『小山田一閑父子でござりまする』

『喧嘩じゃの、隠居が、何しに又、伴と共に、あのように立腹いたしているのか』

『……はっ』

『相手は誰』

『不破数右衛門でござりまする』

『ウム、あれか——』

と、内匠頭は、苦笑を閉じるように唇くちをむすんで、

『数右衛門ではめずらしくない事だ。……源吾。そちにも、云い含めておいたはずではな

いか。ちと、あの粗暴そぼうを撓ため直すようにせいと』

『御意ごいもござりました故、一二度、俳諧はいかいの席などへも誘いりましたが、いつこう風雅などは、心にもそまぬ様子……。それに、数右衛門の数右衛門たるところは、やはり野育ちの素白な性質——あの浪人骨のぶとい所にあるやに存ぜられますので、実は、其後は抛なつて置きましたわけで』

『そうも云えるのう。……何じや、まだ歇やまぬようではないか。理非りひはいずれにもせい、藩邸はんていの内うちで、双方とも不作法千万、見てまいれ』

宵あけしおの上うへの汐しほ

聞き役は、源吾が聞き取った。双方の申し分はそのまま、源吾から内匠頭の耳へとどいた。

(……困った問題が)

という顔は、裁決を待つあいだの、源吾の面にだけあるもので、内匠頭は、さほどな態

でもない。

脇きょうそく息きに倚よつて、しばらく、沈ちんぎん吟ぎんはしていたが――。

何なにつ方も、藩士である、可愛い家来なのだ、傷やつけたくない。そういう気色は見られる。

『――こう沙汰せい』

裁決さいけつはついた。

内匠頭うちざうとうの旨むねをうけると、源吾は、君意を奉じて、てきばきと申し渡した。

『きようは、御息女が輿入の当日であろうが。遠慮えんりょのう、華典かてんの儀、運はばれるがよい。庄左衛門にも、妹の祝日とて、特に何なにらのお咎とがめはない』

一閑は、やや不ふ服ふくな色いろを、眉まゆにあらわした。庄左衛門にも特とくにお咎とがめなし――と云う沙汰は、庄左衛門に何か科とがあるように耳みみへひびいたからである。

だが――親の慾目よくめでも、それへ触ふれてゆくのは、後ろめたかった。自分の知らない不埒ふちやうがありそうにも思えるのである。――然しかし老人らうじんのくせで、何もいわずに引き退ひきがれなかつた。

『して、相手方の、数右衛門は何なにうなりましような。その次第しだいに依よつては、一閑の皺腹しわばらを賭としても、娘むすめの汚名おとがなを洗あらわねば、他家たがへ白無垢しろむくは着きせてやれませぬが』

『——不届き者と、殊ことのほか、殿にも御立腹である』

『それだけでお座ろうか』

『御折檻ごせつかんの為、即刻、転役仰せつけられた』

『又、お国表の方へ』

『いやいや、先頃より松山城の城受取り方の公命が当藩に下つておる。その為、お国表から、大石内蔵助殿が御人数を率いて四国へ渡つておられる故——その方へ、差廻さしまわされることになつた』

『何の御勘気もなく』

源吾は、改まつて、

『御隠居、あなたも若気の御子息をお持ちのことだ。今までも今迄、この先も猶どのような事が起るまいも限らぬぞ。——余りその辺のお沙汰には、論議なさらぬ方がお為ではなからうか』

『いや、お上のお沙汰でござつた。今のことばは、子葉殿として聞いておくりやれ。……  
どれ、今日は忙せわしゆうござれば』

老人も源吾の言葉の裏を読んで、あたふたと、引取つた。



もちろん、その晩の婚儀は万端運んでいる様子だった。

それにひきかえて、数右衛門は長屋の一室に、平日の面影おもかげもなく、俯向うつむいたきりで畏かしこまつていた。殿のお沙汰が臆やがて下るし、深くお咎めないらしいから、そう恐縮していてもいい、心配せずといいと、同僚が代る代る慰めに来ても、彼は、

『うむ。うむ……』

と、頷いてみせるきりで、やはり頭かしらを垂れた儘、畏かしこまつていた。

午頃、お表へ呼び出された。

殿のおことばであるぞ——と何日いつもの源吾とはまるで違つた人のように峻しゅん 巖げんに云い渡しがあつた。

『至急、松山城外にある大石殿の手元まで、殿の御秘札ひさつ一通を携たずえて、急使の役、仰せつけられる。御用済みの上もお沙汰あるまで、出先大石殿の手に従ついて在役の事。よろしいか、数右衛門、相分あいつたか』

『はっ』

『御書状、粗末にすまいぞ』

と、殿墨付一通を渡されて、数右衛門は夢心地に引き退がった。

すぐ旅支度。

そう伝え聞いて、彼の同僚たちは、彼の住居へどやどやと押しかけて、餞別せんべつを渡しな  
がら、凱歌がいかをあげた。そして口々に、

『数右衛門、女はいくらでもあるぞ、あんな女に、未練を持つなよ』

『いくら庄左衛門や一閑が、貴公の不埒を云い立てても、その儘、受け取られるようなお  
上ではない。今度の縁組も、小山田の一家が、金に眼が晦くらんで運んだ事、又、相手の家門  
に媚こびている事、おそらく、殿にもその辺の彼等の心情は、憎んでおられるにちがいない  
のだ』

『庄左衛門の行状など、分っている限りのことは、吾々からも、源吾殿を通じて、お耳に  
達してあるしな』

『はははは。ざまを見ろというものさ。——今宵こよいの婚礼などには、この通り、誰も列しな  
いつもりだ』

と、言葉の餞別にぎも、賑やかだった。数右衛門は、黙々として、藩邸を出た。非番の者だ  
けが十二、三名、靈岸島れいまで見送ると云って、彼と一緒にぞろぞろと肩を押し並べてゆく。  
海路、摂津せつから四国へ行く便船は、こよいの八刻やつの上げ潮ともづなに纜ともづなを解くというので、夕方

の船着場は、積荷や客の送別で雑鬧ざつとうしていた。

『早かったなあ』

『ウム、ちと早かった』

『ちようどよいではないか。数右衛門の行を祝つて、どこかで別盃べつばいを酌くむには』

近くの磯茶屋いそで、そのまま歓送の宴が張られた。遅れ走ばせに見送りに来た藩士も加えて、人数はいつか二十名近くにもなっている。

『あつちの婚礼に負けるな』

と、酒がまわると、誰かが云い出して、誰の歓送やら日頃の鬱を晴らすやら分らない騒ぎになった。数右衛門も初めは浮かなかつたが、盃さかずきが重なるにつれて、ぽつといつもの顔になり、しまいには、国許で大野九郎兵衛から譴責けんせきを喰つたお囃子はやしの真似まねや、裸踊りまでやり出して、江戸詰の人々との、当分のあいだの惜別も遺憾なかつた。

ならくさが  
奈落に捜す

『船が出るそうでございますから、そろそろ、お支度遊ばして』  
茶屋の女中は、少し早めに、そう告げて来た。

『まだ、まだっ』

『もつと持つて来いっ、酒を』

云う者もあるし、又、

『いやもう止めい。乗り遅れては一大事。殊に、殿の御書状おくを持つているのだし——それも何か、お急ぎの御用らしい』

『いくら急いでも、着く船は、着く日にしか着かぬぞ』

『まあいい。——おうい、数右衛門殿、貴公はもう身支度をしたがよいぞ』

数右衛門は、その前から、席を起つて、支度にかかつていたが、何か探すように、帯を振ったり、膳ぜんを退のけてみたりして、うろうろしている態ていだった。

『数右衛門。——何をしているのじゃ、何を』

『うむ……。無いのだ』

『何が？』

『殿の御書面が』

『えっ』

『立ってくれ』

『ほんとか、おい』

『慥かに——こう懐ふところ中に慥乎しっかと——肌につけていたつもりだが』

『冗じょうだん談ではないぞ数右衛門。お墨付を失つたりしたら、一閑に尻を持ち込まれた位な

事ではすまぬぞ』

『ウム……そこを退いて見せてくれ』

『今、見たよ。……切腹ものだぞ、数右衛門』

『なければ、切腹だ』

『そう平気な面つらをして云うなよ。おい諸公、われわれだって、多少困るぞ』

『多少どころではない。これは大変な事になったものだ。すっかり、座蒲団ざぶたんを上げてみい』

『まさか、君公のお手紙を』

『でも、念の為だ』

皆、顔いろを失つた。

酒の酔も、一瞬しゆんに、消えてしまった様子。

船の出るのももう間があるまい。帆車ほがギリギリと闇の空にさげぶ。

『どうしたものだ!』

ただ数右衛門がここで腹を切ったからと云って、それで済む問題でない、第一、松山への使命が遅れる。

数右衛門は、悄然となった。まったく彼の影は、一瞬いつときの間に細く見えた。——つくづく奉公人の器でない事を、今更、自分で知って臍ほそを噛むのだった。

涙笑流々相るいしゅうるるそう

もう探しあぐねた。それでも無いのである。

醜みにくい狼ろうばい 狼らむはもうよそう。

(お詫びだけだ!)

と、密かに肚をすえた。

彼は、墓場のような今までの部屋をそつと出て、あかり灯はないが、川沿いの一室が空いていたので、そこへ入った。

そつと、あと後から尾いて来た一人は、彼がそこへどつかと坐つて、わきざし脇差に手をかけようとするのを見ると、

『待てツ、ま、待てつ』

と、必死で抑えた。

『——今、御一同が、とにかく藩邸へ駈け戻つて、あり有の儘、まま源吾殿まで、御相談に参つた。死ぬにしても、それからにせい。それからなら、われわれも止めはせぬ。われわれとても、お咎めを待たねばならぬ』

数右衛門は、やや落着いて、

『そうかなあ……』

『そうしてくれ、そうしてくれい……。あつ？ ……ひづめ蹄の音、藩邸からもう早馬だ。数右衛門、必ず待つてくれよ』

ばたばたと、廊下へその同僚が出て行くと、すぐその者を案内して、藩邸から駈けつけて来た大高源吾が、息をきりながら入つて来た。

源吾は、彼のすがたの無事を見ると、ほっとしたように、すぐ上意を伝えた。

『数右衛門、そちは何処まで倅せな者であろう。殿のお言葉には、そちに託した一札は、御書面ではなく、お手近の文庫より見出された松山城の絵図面であるとの仰せ。——松山城に城受取りの任を帯びて出向いておる内蔵助殿にとつて、何かの参考にもなるうかと、そちを遣すついでにお托し遊ばされたのじゃ。お墨付ではない。従つて、失うた粗骨は不届きなれど、反古一枚で、人命一つを失うては、なお勿体ないと、有難いおことばだ。——反古と仰せられたからには、もはやおゆるしと承知してよかろう。遅滞せず、すぐこの便船で出立せい』

『……………』

数右衛門は、何と云つてよいのか、到底、言葉には、胸いっぱいの感情を——その一端でも、あらわす事はできなかつた。

『……………か、か、かたじけのう御座りまする』

嗚咽の中に、やつと、それだけ云うと、顔をそむけ、がばと畳に顔をつけてしまった。彼の泣き方も、野人そのものだった。とめどなくしゃくり上げて、凧みずをこぼしている。そして慌てて、袂から凧紙を探し出して凧をかみ、又、涙もそれで拭いた。



一人が、行燈あかりを持って来たが、その態に、遠慮して、部屋の隅へ遠く置いた。  
 ——まだ数右衛門は、泣いていた。君恩の大と、身の不つつかが、口惜しく考え出され  
 て。

源吾はふと、彼が、涙の眼に当てている鼻紙へ眼をとめた。

『……………や？ 数右衛門』

『……………』

『これ、そちが今、袂たもとから出して鼻みずをかんだその紙は何じや』

『えっ？ ……』

源吾は濡れてくしやくしやになつた鼻紙を、顔から離して、凝じっと見ていたが、突然あつと跳び上つた。

『あつたつ。——御書状がここにあつた』

\*

所詮しよせん、ぶとい浪人骨は、親譲ゆずりのもので、われながら何うにもならない。その不束ぶつつか

な不奉公を以て、高禄を喰むのは心ぐるしくてならないから——という一書を、内蔵助に残して、不破数右衛門は、その後、松山城受取の藩の大任がすむと程なく、赤穂にも江戸にも、その姿をかくしてしまった。

『惜しい』

と、云った者が多かった。

けれどそれから六年後、内匠頭の兇きょうへん変があつて、浪士の盟約が密かに結ばれた頃、彼はどこからともなく、のっそりと現われて、大高子葉、潮田又之丞うしおだの二人を介して、義拳ぎきんに加わった。

浪士四十七名のうち、内匠頭が生前中からの浪人として、義盟に名を連ねた者は、彼一人だった。いや真の浪人骨のぶとさを持った人間も、彼一人だったと云つてよかろう。

小山田庄左衛門は、世皆知るとおり、討入の直前に脱走して、彼らしい気働きばたらきから、不義士の名を百世に買つてしまった。

一閑は、それを聞いて、憤死ふんじした。織田家へ嫁いだお千賀も、とかく不和で、数右衛門をどう思っていたか、それも語らずについ終つてしまつたらしい。

(昭和十三年一月)





# 青空文庫情報

底本：「吉川英治全集・㊦ 新・水滸傳（二）」講談社

1967（昭和42）年6月20日第1刷発行

初出：「サンデー毎日 新春特別号」毎日新聞社

1938（昭和13）年1月

入力：川山隆

校正：門田裕志

2013年10月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

※ [# 「さんずい+軒のへん」、第4水準2-79-37] かみ浪人

吉川英治

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>